

フィリピン貧民区・キッズサポートボランティア活動報告書

1、はじめに

●参加期間

2011年9月12日～21日（10日間）

●行き先

フィリピン マンダルヨン市

●訪問施設

国際協力 NGO ボランティアプラットフォームの合宿所

●主な活動

- ・スラムでの生活体験
- ・貧困の子供たちに食料配布
- ・ケガをした子供の手当て
- ・子供たちへ社会秩序の教育
- ・マザーテレサ孤児院にて手伝い
- ・スモーカーマウンテン、スラムや町の視察
- ・ボランティアについての話し合い
- ・空手の練習

2、動機

私は、子供が大好きで世界の貧しい国の子供たちを救う人になりたいと、以前から強く思っていました。しかし、今まで旅行などで、何度か先進国には行ったことがありますが、途上国には行ったことがありませんでした。難民の支援をしたいが、一体何が求められていて、自分に何ができるのだろうかと考えました。しかし、教科書やインターネット等で、言葉で聞いても実感が湧かず、発展途上国と言われる国では、一体どのような現状なのか、自分の目で見て、肌で感じたいと思い、参加を決意しました。また、高校生のときオンライン英会話で教えてもらっていた先生が全員フィリピン人の方で、観光地のビーチの話から、格差の話まで様々な事情を聞く機会があり、フィリピンという国に興味を持ったというのも一つの理由です。

3、1 活動内容

<1日のスケジュールの例>

- 9：00 起床
合宿所の掃除、合宿所周辺のゴミ拾い
- 9：30 朝食
マスター（受け入れ先の責任者）の話、その日の打ち合わせ
- 11：00 ファーストエイド
スラムを巡回し、ケガをした子供の手当てをする
- 14：00 昼食
- 15：00 フィーディング
2、3か所場所を移動し、子供たちにパンを配る
- 19：00 夕食
マスターの話
- 21：00 日本人のみのミーティング
その日を振り返って感じたことを話し合う
- 23：00 洗い物、水の見張り
消灯、就寝

3、2 活動内容詳細

<フィーディング>

スラム街には、一日一食おかゆを食べられるか食べられないかという子供がたくさんいます。そういった貧しい子供たちに、パンにジャムやクリームを塗って一人ずつ手渡しで食料を配布しました。お店では、500ペソ（日本円にすると1000円）で125個のパンが購入できます。小さなパンをおいしそうに頬張る子供たちの姿を見ると、思わずマサラップ？（おいしい？）と何度も聞きたくなります。私は最初にフィーディングをしたとき、子供にパンを与えて、彼らの笑顔を見られたことで、とても満足した気分になりました。しかし、後にそれは大きな間違えだということに気付かされました。「ただ子供に食料を与えることは、野良犬にえさを与えるのと同じだ。」というマスターの言葉に、私はドキッとしました。「人間が同情して子供の野良犬に餌を与えると、犬は、人間を見ると餌をくれると思い、人間に懐き、群がるようになる。そのうち成犬になったので、人間がいきなり餌をあげないといったら、犬は怒って人間に襲い掛かるようになる。」と教えられました。

ここで大事なことは、ただ単に同情して子供たちに食料を与えることではありません。パンを与えることを通して、子供たちに社会の秩序や礼節を教えるということが、私たちのミッションなのでした。フィリピンのスラムの人々の生活には、社会の秩序というものはありません。親であるにも関わらず昼間から仕事もせず酒を飲んだり、賭け事で遊んだりして、子供にしつけをする大人もいません。そして、このままこの子供たちが育ったら、これらの大人と同じ大人に成長するだけです。それではいつまでたってもこの地域は発展出来るはずがありません。

物を貰ったら「ありがとう」と言うこと。一列に並んで、順番を守るということ。そういった基本的な、でも、とても大切な小さなことを一人一人が出来るようになることで、社会は変わるという信念の元マスターは活動していました。子供たちは素直で、ペラペラ（並ぼうね。）と言うと、順番に並びます。何度も言っているうちに、子供たちは、子供たち同士で一列の列を作り、自分の順番を待っていました。こういう教育を現地で続けることが、この国の将来に大きな意味を持つのだと感じました。そして今、私が日本に帰って出来ることは、人とのちょっとした会話の中でこの 1000 円でこんなことができるのだということを身近な人から伝えていくことだと思いました。



<ファーストエイド>

スラムでは生活をするための整備がしっかりと出来ておらず、歩いていて、危険な場所を数多く発見しました。例えば、下水道は、ふたのようなものがなく、むきだしになっているため、子供が夜暗いときに歩いていたら気づかずに落ちて大けがになりそうな場所があります。川には、横幅の狭い板がかかっており、それが橋になっていましたが、少しバランスを崩したら川におちてしまいそうでした。足場には針金やガラスなど、危険なものがたくさん散乱していて、転んだら擦り傷ですむようには思えません。そんな状況で生活をしている子供たちのなかには、やはりケガをしている子供がたくさんいました。「ケガをしている人はいますか？」と声をだしながらスラムを巡回すると、多くの子供たちが集まってきます。擦り傷から出血大量の大きなケガまで、いろんな子供の手当てをしました。ばい菌が入っている可能性がある傷は、かさぶたをとってから消毒をします。痛い消毒も、

子供たちは泣きわめくこともなく、じっと我慢していました。また、私は前歯がない子供をたくさん見ました。傷は消毒をしてあげることができますが、歯の虫歯の治療は簡単にすることが出来ません。次に彼らのところに行くときは、歯ブラシを持って行き、歯を磨くという習慣を教えてあげたいと思いました。

<スモーカーマウンテン、スラムや町の視察>

スモーカーマウンテンとは、簡単に言えば、町中のゴミが運び込まれ、積み重なり山になったものです。わたしはここに行く前、ただのゴミ山だと思っていました。しかし、その山を見ると、四分の一くらい、森林になっているのです。フィリピン政府は、スモーカーマウンテンを恥だと思い、自ら開発をおこなっているのです。電線があることには驚きました。しかしメディアは、その部分を映さず、スモーカーマウンテンの映像を、人々の同情を買い、募金のだしに使っているというのです。スモーカーマウンテンのふもとは、普通に生活をしている人々がいます。一見すると、ゴミだらけの家で、可哀想に、と思ってしまうのですが、それらのゴミは、彼らにとって、すべて価値がある売り物なのです。彼らは全然可哀想ではないのです。頑張れば、バイクを買うことも出来ます。立派な家を構えている人もいました。可哀想なのは、スモーカーマウンテンのゴミをなくすことです。スモーカーマウンテンには、大統領のゴミまで運ばれてくるそうです。価値のあるものが、たくさん見つかるはずですよ。

ゴミ山からマットをとってきて、表面の汚れた面を剥がし、裏返してもう一度貼り、カバーをつけ、立派な布団が出来上がっているのを見て驚きました。

スラムの町には、一つの井戸がありました。その際、フィリピンの子供が、きれいな水を飲むことが出来ず、病気になっているという情報を得たため、「井戸を作る計画」をしている、ということを知った日本人が話していました。しかし単純に井戸を作ることが、本当に現地の人々のためになるのでしょうか。わたしたちの価値観を押し付けて何かを作ったら、その国では今までできていたことができなくなってしまう可能性があります。例えば、雨水を飲んでいたので飲まなくなったら、そういう体になります。また、遠くまでバケツをもって水を汲みに行くという行動が、親の言うことを聞くというしつけといった意味もあったならば、単純に井戸を作ることが、その国の文化の消滅につながるかもしれません。それに、10年もたつて、水が枯れてしまったら、それから彼らはどうするのでしょうか。中途半端な知識で行動を起こすことは、危険なことだとマスターに教えて貰いました。

<マザーテレサの孤児院>

マザーテレサの孤児院を訪問する朝、マスターに「孤児院にいる子供たちは可哀想だと思う？」という質問をされました。私は実際、可哀想だと思っていました。なぜそう思うかというと、親がいないということが一番大きな理由でした。私がそう答えると、マスターは、「この多くの親は、子供にゴミを拾ってお金にかえさせ、自分がそのお金を使って

ご飯を食べるんだ。」と教えてくれました。私とすごく仲良くなったボランティアキッズの一人である10歳の男の子も、親に働かせられ、毎日稼いだお金は親にとられていました。そんな日々が嫌になった彼は、家に帰らず自分が稼いだお金でお菓子を買って空腹をしのぐというのを続けていました。そしてストリートチルドレンになりかけていたと聞き、大変衝撃を受けました。親に愛されることが当然だと思っていた自分が、どんなに恵まれているのか痛感しました。

孤児院の子供たちは、スラムで生活している子供たちに比べ質の良い洋服や、サンダルを身に着けていました。学費も支払ってもらえ、食べ物もあるため環境的には良い生活を送っていて可哀想と思うのは間違っていたと思いました。

4、まとめと感想

フィリピンのスラムでは、子供の稼いだお金を取り上げて自分のものにするような親がいるせいで、沢山の子どもが可哀想な思いをしています。そういった大人が増えては絶対にいけません。いまの子供たちがそのような大人には育ってほしくないです。「社会の秩序を覚え相手を思いやれる人間になるためには教育をする人が必要なのだ。」と学びました。スラムの人々を見て改めて実感しました。何か「もの」で残したりするのではなく、そういった「習慣」が人々に身についたら素晴らしいと思います。その土地の習慣を変えるというのは、本当に簡単に出来ることではありませんが、少しずつでも前進できたらという思いで活動をしているマスターを、私は心から尊敬します。

スラムでの生活を始めた当初、貧民区の生活ではトイレトペーパーが無く、シャワーが無く、水も十分に無く、ここで生活する人々は本当に不便だと感じました。しかし、よく考えてみると、先進9か国以外の国ではそれが普通な状況で日本人の価値観でものを見ることは間違っていることに気づきました。

今回、現場に行ってみてわかることが本当に沢山あり、多くのことを学ぶことができました。これからは、なんでも自分の価値観でものを計るのではなく多方面からものを見るようにしたいと思います。

そして、私は今回のボランティアに参加して、自分がどれほど無知で、無力であったかを、思い知りました。これといった優れた技術を持っている訳でもなく、胸を張ってフィリピンの子供たちの役に立てたとは絶対に言えません。逆に、子供たちに助けられ学ぶことばかりでした。

この10日間「ボランティアとは何か？」という疑問をひたすら考えていました。明確な答えは、まだ出ません。しかし、マスターが何度も言っていた「こんなことをして、人の役に立とう！と頭で考えるのではなく、形にのこらなくてもいい、人のために無償の気持ちでそのとき心で感じたままのことを素直に行動に移せばいいんだ。」ということなのだと思います。

ボランティアはライフワークです。マスターの合言葉である、「半分は自分、半分は他へ

の思いやりの精神」を忘れず日々人のことを思った行動を続けて生活していきたいです。

また、子供たちと生活していく中で気づいたことがあります。それは、人の笑顔は相手を笑顔にすることが出来るということです。明るい笑顔は生きる力を与える気がします。たとえ言葉でコミュニケーションができなくても、笑顔で通じ合うことが出来る。笑顔は世界共通の言語であると感じました。

最後に、10日間を通して一番学んだことは感謝の気持ちです。実際スラムでの生活は私の想像を絶するものでした。私は今まで生きてきたなかで、頭で考えた感謝しかしたことがなかったように思います。日本にいて当たり前と思っていたことが本来そうではないということを知り、人やものに対して心からの感謝というものを初めて感じました。

マスターという素晴らしい恩師に出会えたこと、貴重な経験をできたことにも心から感謝しています。また、私を日本に生んでくれた親に感謝し、自分が何不自由ない生活を送り、学ばせてもらえる環境にいることにも常に感謝し様々な勉学に励みたいと思います。